四庫全書における「觀光」の用例について

On the usage examples of “ Tourism” in “ Complete library in four branches of literature”

上田　卓爾

UEDA Takuji

星稜女子短期大学

Seiryo　Women’s　Junior　College

(要約)

日本における観光学の著作はそのほとんどが判で押したように、「観光」の語源は説明もなしに易経の「観」の「觀國之光」だとし、用例はすべて江戸時代以降の日本のものを掲げている。また、現在でも日本での造語だとする説を信ずる研究者もいるようである。本研究は日中の辞典類を比較して「観光」が日本の造語でないことを証明した。日本における「観光」の初出年代は 15 世紀末であるとの従来の説を覆し、15 世紀初めの用例を示すとともに「観光上国」が四庫全書にも多数あり、同書が「観光」の用例を探るには非常に有効なツールであることを示した。全用例の検証に着手したばかりであるが、いくつかの興味深い用例が見つかっている。

(summary)

In almost all the writings on ‘Tourism’ in Japan, we can see such stereotyped description as “ The origin of the ‘Tourism’ come from ‘ View the national glory’ in ‘ Viewing’ section of　the ‘ Book of Changes’” without any further explanation.

Furthermore, only Japanese usage examples can be seen; the oldest one is that of late Edo era. Some researchers still seem to believe that ‘Tourism’ or ‘Kanko’ is made in Japan.

In this paper, comparing both Japanese and Chinese dictionaries, I clarified that ‘ Tourism’ is not made in Japan. Also, I proposed the believable oldest usage examples in Japan and pointed out some examples are also found in ‘Complete library in four branches of literature’.

‘Complete library in four branches of literature’ contains 1,359 usage examples of ‘Tourism’ and seems to be quite useful for the research of ‘Tourism’. I have found some interesting usage examples.

(主題語) 觀光、岩倉具視、日明勘合貿易、四庫全書電子版

(Key words) Tourism, IWAKURA Tomomi, Tally trade between Japan and Ming dynasty, digital Complete library in four branches of literature

Ⅰ．はじめに

1．「観光」は日本製か

10 年ほど前の学士会会報に、「観光」という言葉は、古代中国の『易経』から抜き出したもので、幕末につくり出された言葉である。」「中国では、観光とはいわず、『旅游』と表現している」と書かれた文章が掲載されていた。[1](下線、筆者)

現在では「中国国家観光局」という公式サイトもあるから、このような説を述べる者はいないはずであるが、次のような例を見るかぎり、実態はそうでもない。

① 「観光の語源をもつ肝心の中国には、現在では参観、旅遊や遊覧という言葉が多くみられるが、観光の用例は少ない。」[2]

② 山崎 (前略)「米欧回覧実記」の最初に岩倉具視の筆による「観光」という大きな字が載せられておりますが、1870年代において、この「観光」という言葉はどういう意味で使われていたのでしょうか。

銭 これは『易経』にある「国之の光を観る」という文章から来たことばです。この場合の「光」は文物や制度というようなことで、いわば外国の文明に触れ、調査研究するというような意味でした。今のようにツアーとかサイトシーイングのような意味に使い出したのは日本人であろうと思います。[3] (下線、筆者。国之の光を観るは原文のまま)

①┌は単なる知識不足であるとしてもよいであろう。②は「米欧回覧実記」の扉に岩倉具視が揮毫した「観光」について、日本人教授が中国人准教授に質問したそのやり取りが書かれた部分であるが、双方とも理解不足であると思われる。岩倉使節団の行動から見て、この揮毫を「米欧の文物・制度を観る」と解釈するのはあながち誤りとは言い切れないが、岩倉が使節団員・留学生に訓示した文章から判断すると、別に解釈したほうが良いと思われるのである。「具視歐米二洲へ出發ノ事」という文中に、

「二十二日具視船中ニ於テ隨行諸員ヲ誡諭ス其文ニ曰ク、として、

『文明礼儀ノ風ハ平常ノ動作ニ著ルレハ瑣小ノ謹マサルヨリ大體ヲ辱シムルコト多シ外國人ニ接スルノ際ニハ尤此意ヲ存セサルヘカラス殊ニ今度施設一行理事諸員ハ各省ノ選ニシテ留學生モ華族多キニ居ル皆國ノ儀表模範トモナルヘキ人ノミニテ外國人モ船内ニ嘱目シテ國光ヲ觀ントス左レハ一人ノ言行モ其關係甚タ輕カラサルコトハ固ヨリ諸君ノ瞭知スル所ナリ(後略)』」[4]とあることから、國は日本であり、光は「文明礼儀ノ風」とされているのである。なお、このエピソードは「米欧回覧実記」には記載されていない。[5]

ところで、「観光」が日本で作り出されたものでないことは、上田が研究ノート「中国における「観光」の用例と日本への伝播」[6]で日中の辞典類を引用して既に明らかにしているのであるが、改めて同旨を記すことにしたい。

2. 「観光」は日本製ではない

1) 日本の漢和辞典における「観光」の用例

語源の『易経』「觀國之光」の他に用例があるものは僅かに『漢和中辞典』、および『大漢和辞典』のみであり、『大字典』・『広漢和辞典』・『大字源』には語源だけで用例はなく、『字通』には「観光」という項目すらない。『漢和中辞典』は陳孚の「觀光稿」のみを取り上げており、「紀行の詩を集め、土風を描いてある書物」と説明を加えている。

『大漢和辞典』のほうが用例としては多く、

①曹植の「七啓」で「觀國之光」

②耶律楚材の「和李世栄韻詩」で「黎民歓仰徳、萬国喜觀光」

③元の陣孚（陳孚の誤記）の「觀光稿」

④宋の羅㦸(せん)の号である「觀光山人」

を掲げており、「觀光稿」については「紀行の誌を集め、土風を描いてあり、考証の資とするに足る。」（四庫提要、集、別集類）としてあるが、これは『四庫全書簡明目録』（ 清 永等 著）に記載された「内上都紀行詩、皆挙絵土風、可資考証」（上都紀行ノ詩ヲ内(い)レ、皆土風ヲ挙絵ス、考証ニ資スベシ）を直訳したものにすぎない。

2) 中国国語辞典における「観光」の用例

①『辞海』では『易経』の「觀國之光」の説明に引き続いて、「後称参観別国或別処的景物為観光」（後ニ別国或ハ別処ノ景物ヲ参観スルヲ称シテ観光ト為ス）との説明があり、用例として耶律楚材の詩「黎民歓仰徳、萬国喜觀光」をあげている。これは前出の『大漢和辞典』の用例に符合するものである。

②『中文大辞典』も同様に、「後世即称遊覧視察一国之政教風習為觀光」（後世、一国ノ政教風習ヲ遊覧視察スルヲ称シテ觀光ト為ス）として耶律楚材の詩「黎民歓仰徳、萬国喜觀光」をあげている。これも前出の大漢和の用例に符合するものである。（なお、同辞典は觀光山人、觀光稿も項目として取り上げているが、作者元の陳孚を陣孚と誤記しているところまで大漢和辞典と酷似している。）

③『辭源』には「觀見國之盛徳光輝」（国ノ盛徳・光輝ヲ觀見ス）とだけ説明されており、孟浩然の「送袁太祝尉豫章」中の「何幸遇休明、観光来上京」の他に、程頤・伊川文集三の「回禮部取問状」の「新制稱四方人士願観光者」をあげ、

④『漢語大詞典』では、「観覧国之盛徳光輝」（国ノ盛徳・光輝ヲ観覧ス）として、
鮑照の解謁謝侍郎表の「観光幽節、聞道朝年」、
蘇軾の薦何宗元十議状の「聞命忻然、皆有不遠千里観光求用之心」、
方孝孺の敬次張南軒贈朱文公韵送董公の「昔忝国士薦、観光帝王州」、
呉敬梓の儒林外史の「唯是禮樂大事、自然也願観光」があげられている。さらに、「后泛指参観」（後泛ク参観ヲ指ス）として
魯迅の偽自由書の王化の「事后還要挑選瑤民代表到外埠来観光」、
郭沫若の洪波曲の 14 章の「我一個人到街上去観光」が収録されている。

⑤辞典ではないが、用例集として知られる『佩文韻府』には「觀光行」・「觀光客」・「觀光挙」などの語が掲げられており、「觀光客」の用例として舒頔の詩 の「白頭元是觀光客手弄梅花感慨吟」が採録されている。全文を引用すると、

「金陵懐古」
六代繁華古又今　鍾山王氣拂雲岑　玉驄聲斷烏臺寂　赤幟陰移畫省深　月照觚稜風淅淅　霜清甬道夜沈沈　白頭原之觀光客　手弄梅花感慨吟

となっているが、手に梅花を弄び、感慨して吟ずる者が国の光を観る客とは考えにくく、梅花を愛でる意味において現代の「観光客」と同様に理解すべきではなかろうか。このような例は他にも見られる。前出の陳孚の『玉堂稿』に収録されている「觀光樓」と題する詩は、
試上危樓望　東風尺五天　一溪寒瀉月　萬壑瞑含烟　古塞黄雲外　巍臺白雁邊　誰憐家萬里　有客擁衾眠
である。これも詩の内容は國之光を觀ているとは考えにくい（國之光を觀るための樓であったかも知れないが）。
このように辞書類から辿っていくと、「觀光」が脈々と受け継がれてきた様子が窺え、元代には現代の「観光」と同様な意味でも使用されており、熟語としても用いられていたことがわかる。

3).時系列的に見た「觀光」の用例

しかし、辞典類の 10 数例だけではいささか少なすぎると考え、四庫全書(文淵閣四庫全書電子版)に 1121 件、1359 の「觀光」の用例があることを指摘し、これを引きつつ人名事典などから生没年を得て、時代順に次の 24 例を紹介した(①は厳密には「觀光」の用例とは言えない。)。なお、各例の末尾に番号のあるものは四庫全書電子版の「觀光」の検索結果としての番号である。

① 晋の曹子建（曹植、192～232）の七啓に「是以俊又來仕、觀國之光、挙不遺材、進各異方」（曹植集 校注 1998 人民文学出版社 12 頁）
② 南北朝時代の宋の鮑照（410 頃～465）の解謁謝侍郎表に「觀光幽節、聞道朝年」、（鮑明遠集巻 9）[488]
③ 唐の孟浩然（689～740）の五言律詩、送袁太祝尉豫章に「何幸遇休明、觀光來上京」、（孟浩然集　巻 4）[495]
④ 宋の釈賛寧（919～1002）撰、宋高僧伝

唐京兆大興善寺不空伝に「幼失所天隨叔父觀光東国」、（宋高僧伝　巻１）[478]
唐京兆大慈恩寺彦悰伝に「貞観之末觀光上京、求法於三蔵法師」、（同上　巻４）[479]
唐揚州大雲寺鑑真伝に「雖新発意、有老成風、觀光両京名師陶誘」、（同上　巻 14）[480]
陳新羅国玄光伝に「禅法于是觀光陳国利往衡山」、（同上　巻 18）[481]
唐上都青龍寺法朗伝に「神效屢彰京闕觀光、人皆知重」、（同上　巻 24）[482]

⑤　宋の程伊川（1033～1107）の回禮部取問状に「新制稱四方人士願觀光者、掌儀引入、遊覧堂舎、観禮儀、聴絃誦、唯不得入斎」、「願觀光者、既不得入斎」、「願觀光者、無時得入」、「今来立觀光之法」、「自可使觀光之士」、（二程文集　巻 8）[908]

⑥　宋の蘇軾（1036～1101）の薦何宗元十議状に「聞命忻然、皆有不遠千里觀光求用之心」、（東坡全集　巻 55）[522]
朝辞赴定州論事状に「必先處晦而觀光處静而」、（同上　巻 64）[523]
高麗大使遠迎啓に「伏審觀光魏闕自忘浮海之勤」、（同上　巻 71）[524]
處士王臨可試太学録に「汝所為而觀光焉可」、（同上　巻 108）[525]
賜溪洞彭儒武等進奉興龍節溪布勅書に「志在觀光遠修任土」、（同上　巻 110）[526]
寒節就驛賜于闐國進奉人御筵口宣に「有勅汝等觀光上國述職」、（同上　巻 111）[527]
賜于闐國進奉人正旦就驛御筵口宣に「有勅重驛遠来觀光戻止属人」、（同上　巻 112）[528]

⑦　前出、元の耶律楚材（1190～1224）の和李世栄韻に「黎民歓仰徳、萬国喜觀光」、（湛然居士集　巻 1）[641]
読唐史有感復継張敏之韵有脂粉気息遷就声韵故也呵呵に「百済請觀光關塞」、（同上　巻 9）[642]

⑧　前出、元の陳孚（1239～1303）の觀光稿[675][676]および玉堂稿中の「觀光樓」、（陳剛中詩集　巻 3）[677]

⑨　前出、元の舒頔(じょてき)(1304～1377)の金陵懐古に「白頭原是觀光客手弄梅花感慨吟」、（貞素斎集　巻 7）[720]

⑩　明の方孝孺（1357～1402）の敬次張南軒贈朱文公韵送董公に「昔忝国士薦、觀光帝王州」、

⑪　清の呉敬梓（1701～1754）の儒林外史に「唯是禮樂大事、自然也願觀光」

⑫　清の曹仁虎（1731～1787）の皇朝文献通考に「浮薄之士子将以觀光為遊戯」（皇朝文献通考　巻 50）[295]

この中で注目すべきは、④の『宋高僧伝』と⑫の『皇朝文献通考』であろう。「觀光」が「一国ノ政教風習ヲ遊覧視察ス」ものか、あるいは辞典類の項で述べた⑧・⑨のように現代の「観光」と同様に理解される「遊覧」であるのかは、ここにあげた用例をさらに詳しく検証する必要があるが、少なくとも④の『宋高僧伝』では、それぞれの高僧の行動は政治色のある「一国ノ政教風習ヲ遊覧視察ス」よりは「遊覧」の意味が強いと思われる。⑫の『皇朝文献通考』については、「（本来公務であるべき）觀光を浮薄の士子が遊戯と為している」と、まるでどこかの「視察旅行」と同じような実態が浮き彫りにされているのがおもしろい。

上記 2.1)～2.3)において、一応中国における「觀光」の用例を示したのであるが、四庫全書電子版の全用例を検証していないため、あくまでも便宜的な例示にとどまっていると言わざるをえない。従って、当該研究ノートでも「今後の課題」として、「今後も詳細な検証を行う必要がある。さらに、日本への伝播については五山文学に「觀光」が初出する点に着目して推論を行ったが、それ以前の用例がないかを検証し、より正確な伝播の経路を探ってみたい。」としておいた。[7])

Ⅱ.「觀光」の用例に関する研究の進展(日本の初出例の遡及と四庫全書))

上記Ⅰ.2 の時点においては、五山文学「翰林葫蘆集」の「興宗明教禅師行状」に「希宗曰、某久欲觀光於中

華、今也時哉」とあるのが日本での初出(1482 年頃)であるとしていたが[8]、上田のその後の研究により、初出は約 80 年遡及して 1403 年であることが判明した。[9]日明勘合貿易に際して、外交文書である「遣明表」を五山の僧が起草したところから手掛かりを得たものであるが、以下に初出から江戸初期までの 10 例を示す。

〈表 1〉

	年　次	西暦	出　　典	用　　例	備　　考
①	応永 10 年	1403	善隣国宝記	「仰觀清光、伏獻方物」	瑞渓周鳳
②	応永 10 年	1403	絶海録	「觀光正際太平辰」	絶海中津
③	永享 4 年	1432	善隣国宝記	「謹使某人仰觀國光、伏獻方物」	瑞渓周鳳
④	応仁 2 年	1468	島隠集「序」	「成化四年、觀光上國」	洪常子
⑤	文明 14 年頃	1482 頃	翰林葫蘆集「興宗明教禅師行状」	「希宗曰、某久欲觀光於中華、今也時哉」	景徐周麟
⑥	文明 15 年	1483	補庵京華別集	「南遊中華、且以觀光」	日東野釋景三
⑦	明応元年	1492	翰林葫蘆集	「今乃以王事而觀光上國」	景徐周麟
⑧	永正 8 年	1511	翰林葫蘆集	「庶然觀國光」	景徐周麟
⑨	天文 8 年	1539	策彦和尚初渡集(抄)中	「兩觀上國之光」	策彦周良
⑩	明暦 3 年	1657	善隣国宝記(跋)	「偶因徐福是觀光上國」	虎林中虔

(出典：上田、2008、101～102 ページ)

なお、上表中、④・⑦・⑩で「觀光上國」という表現が用いられていることに注目し、別途四庫全書を検索したところ、84 件、87 例が得られた。ここでも四庫全書電子版が有効なツールであることがわかった。

III. 四庫全書における「觀光」の用例について

1. 「觀光」の除外例について

上記Ⅰ、Ⅱで述べた研究成果については極めて少数の反応が見られた程度で学界全体の興味を惹くには至っていない。しかし、「観光学」の研究に携わる者としては、原点ともいえる「観光」の用例についてもっと関心を持つべきではないだろうか。そのためにも四庫全書の用例を検証することが必要となるのである。

そこで本年 2 月から 3 月にかけて国会図書館関西館で集中的に文淵閣四庫全書電子版の「觀光」の全用例をコピーし、研究を進めていくこととした。

既に上田が指摘しているように[10]、文淵閣四庫全書電子版は検索機能はあるものの、「觀」と「光」が連続して表記されたものを抽出するため、たとえば、欽定四庫全書総目、巻 125　**[2]**の明の楊觀光のような人名や、『資治通鑑』　巻 40　**[77]**の世祖光武帝上之上の中の「觀光武之所以取関中」のように、光武ノ関中ヲ取ル所以ヲ觀ルニと読むべきところを「觀」と「光」が連続していたために起きてしまった明らかな誤検索も存在する。

そこで、1,121 件・1,359 例について、まず明らかに人名と認められるものと誤検索と認められるものの 2 種類を除外することとした。

分類については、電子版の分類どおり四庫全書の基本分類である経・史・子・集の 4 部に、目録および附を加えて 6 分類とした。その結果、全 1359 例のうち 18%強にあたる 245 例を除外することとした(表 2 参照)。「目録」の除外件数が 3.5 件となっているのは、欽定四庫全書総目、巻 166 [3]に 1 件 6 例あるうち、人名が 3 例あったためである。

〈表 2〉

	件　数	例　数	除外件数(人/誤)	除外例数(人/誤)
目録	9	18	3.5(3.5/0)	10(10/0)
経　部	52	79	1(1/0)	1(1/0)
史　部	310	422	115(89/26)	145(119/26)
子　部	116	126	18(9/9)	19(10/9)
集　部	633	713	57(50/7)	69(62/7)
附	1	1	1(0/1)	1(0/1)
	1,121	1,359	195.5(152.5/43)	245(202/43)

(文淵閣四庫全書電子版より上田作成)

2.経部について

[10]～[61]の 52 件中、[10]～[52]が「易類」、[53]が「詩類」、[54]が「礼類」、[55]・[56]が「春秋類」、[57]が孝経類」、[58]・[59]が「五経総義類」、[60]が「楽類」、[61]が「小学類」に分類されている。うち[54]は人名(兪觀光)であるので除外する。

さて、「易類」の中でも「觀光」が出てくるのは「觀」の六四だけではない。六二あるいは六三にも出る。初六の解釈にもあらわれるのである。さらには「觀」以外にも「火」、「咸」、「損」、「旅」、「晋」の注釈に「觀光」が見られる。時代的に見れば宋、元、明、清と切れ目なく続いている。経部には宋以前の文献がないので、あくまでも仮説ではあるが、易経の「觀國之光」の「觀」と「光」が結びついた「觀光」は少なくとも宋代には存在していたことになる。

次に、史、子、集の各部について、「觀光」単独だけでなく熟語として用いられているものをチェックしてみると、

3.史部について

全 277 の用例中、「觀光」の用例の初出は三国志の魏志[62]で、撰者　陳寿(233～297)の没年からみて 3 世紀末頃といえる。「觀光」単独でなく熟語として用いられているものは、

觀光集　26、觀光稿　3、觀光詩集　1、觀光上國　13、觀光亭　4、觀光門　4、觀光橋　3、觀光渡　1、觀光之志　2、觀光之願　5、觀光之士　1、觀光之念　1 であった。

「觀光集」の初出は宋の文度となっている[66]。「觀光上國」の初出は明史　巻 326 で利瑪竇(ﾏﾃｵ･ﾘｯﾁ)のことが述べられている[76]。(ここで「初出」とするのは史部の用例の中で最初に見られるもの、の意味で使用している。以下の各部についても同様である。)

4.子部について

全 107 の用例中、「觀光」の用例の初出は「大学衍義」補巻 66　で建隆 3(962)年のことが述べられている[377]。熟語として用いられているものは、

觀光法　7、觀光上國　6、上國觀光歌　1、觀光東國　1、觀光上京　1、觀光兩京　1、觀光京師　1、

觀光之舉　2、觀光集　2、觀光行　1、觀光客　1、觀光之使　1、觀光之士　1、觀光之喜　1、觀光之彦　1、

であった。

「觀光法」の初出は宋の朱子の「二程遺書附録」[372]、「觀光上國」の初出は宋の曾慥の「類説」巻 18[418]、「觀光集」の初出は明の陶宗儀の「説郛」巻 10 下[419]であるが、作者である王轂は唐の詩人である。なお、觀光法については、特に御定小学集註巻 6　外編[374]の伊川先生の項の注に、「觀光謂觀見國之盛徳光輝」とあるのに注目すべきであると思われる。これはⅠ.2.2）の中国国語辞典の説明とほとんど同じ表現である。

5.集部について

全 644 の用例中、「觀光」の用例の初出は南北朝時代の宋の鮑照（410 頃～465）の鮑明遠集巻 9[488]で、熟語として用いられているものは、

觀光上國　68(これに類する例、觀光于上國　2、觀光於上國　8、觀光京師　5、觀光於京師　2、觀光京國　3、觀光帝都　2、觀光上京　3、觀光於上京　2、觀光來上京　1、觀光來上國　1、觀光上都　1、上國觀光　2、上國觀光歌　1 を加えれば 101 となる)、觀光之舉　3、觀光之彦　1、觀光之士　4(觀光士　3 を加えれば 7)、觀光之籍　1、觀光之試　1、觀光之請　1、觀光之志　2(觀光志　3 を加えれば 5)、觀光之行　1(觀光行　2 を加えれば 3)、觀光之客　2(觀光客　6 を加えれば 8)、觀光之願　1(觀光願　2 を加えれば 3)、觀光之法　1(觀光法　2 を加えれば 3)、觀光樓　4、觀光操(楽曲の名称と思われる）　3、觀光集　3、觀光稿　2、觀光館　2、觀光亭　1、觀光利賓　4(觀光利用賓　1 を加えれば 5)であった。

「觀光上國」の初出は唐の駱賓王(640～684？)の駱丞集　巻 3[493]、「觀光利賓」の初出は唐の楊炯(？～692)の盈川集　巻 7[490]である。

熟語としての 262 例中、頻出のものを並べれば、

觀光上國　87 例(125)、觀光集　31 例、觀光法　10 例、觀光客　9 例、觀光稿　5 例、觀光之舉　5 例

となる。

Ⅳ.まとめと今後の課題

まだ全用例を 4,5 回通読した程度であり、読解力もあまりあるとは言えないので、結論めいたことは発表できるには至っていないが、少なくとも「觀光」最古の用例は 3 世紀末であり、國之光を觀て王に仕える用例ばかりでなく別国或は別処の景物を参観することの用例が従来信じられてきた元代より早く、唐の時代に存在していることは言えるであろう。

さらに、研究対象としては除外したが、人名(字、号も含め) の「觀光」が多数存在することは、子供に期待をかけて「王に賓たるに利あり」として命名した可能性も考えられる。

今後の作業としては、出典が同じものとみられる重複した用例を除外し、さらに、「觀光」ではあっても日・月・星の「光」を「觀」ているように読み取れるものを除外することで、これによって初めて四庫全書における用例が確定されることと考える。

参考文献

（著書）
1) 米欧回覧の会、『岩倉使節団の再発見』、2003
2) 中華書局辞海編集所、『辞海』、1961
3) 中国文化研究所、『中文大辞典』、1978
4) 張玉書、『佩文韻府』、1983
5) 永瑢、『四庫全書簡明目録』、1985
6) 貝塚茂樹・藤野岩友・小野忍、『角川漢和中辞典』、1959
7) 漢語大詞典出版社、『漢語大詞典』、1992
8) 溝尾良隆、『観光学の基礎』、2009
9) 諸橋轍次、『大漢和辞典』、1959
10) 商務印書館、『辭源』、1986
11) 多田好問、『岩倉公實記』中巻、1928

（論文）
1) 岡田喜秋、「『観光』の普及・半世紀の功罪」、『学士会会報』№820、1998
2) 上田卓爾、「日本における『観光』の用例について」『名古屋外国語大学現代国際学部紀要』第 4 号、2008
3) 上田卓爾、「観光学における『観光』の歴史的用例について―『観光丸』から『観光』を見直す」『第 11 回観光に関する学術論文　入選論文集』2005
4) 上田卓爾、「中国における『観光』の用例と日本への伝播」『日本観光学会誌』第 45 号、2004

(注)

---

[1])岡田、1998、141 ページ。
[2])溝尾、2009、21 ページ。
[3])米欧、2003、144 ページ
[4])多田、1928、953 ページ
[5])上田、2008、97 ページ
[6])上田、2004、83～87 ページ
[7])上田、2004、87 ページ
[8])上田、2005、45 ページ
[9])上田、2008、85～104 ページ
[10])上田、2004、85 ページ